



|              |  |
|--------------|--|
| Title        | ニール・サイモンの喜劇の精神 ー人生再生と継続のためのドラマツルギーー  |
| Author(s)    | 瀧尻, 浩士   |
| Citation     | 大阪大学, 2025, 博士論文   |
| Version Type |  |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/101581">https://hdl.handle.net/11094/101581</a>  |
| rights       |  |
| Note         | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

|   |  |
|---|--|
| 氏名 ( 瀧尻 浩士 )  |  |
| 論文題名  | ニール・サイモンの喜劇の精神<br>—人生再生と継続のためのドラマツルギー— |
| 論文内容の要旨   |  |
| <p>本論文は、ニール・サイモンの喜劇作品にみられる「人生再生と継続」というテーマに焦点を当て、従来とは異なる観点から作品を分析および再評価し、新たなる喜劇的価値の発見と現代的意義を明らかにする試みであるとともに、そこからサイモンの喜劇の精神とドラマツルギーの解明に向かうことを目的とする。</p> <p>劇作家ニール・サイモンは、その長きにわたるキャリアを通して数多い作品を発表し、その中の多くをヒットさせた。にもかかわらず、テネシー・ウィリアムズやアーサー・ミラーなどアメリカを代表する戦後の劇作家たちと比べて、アカデミックな評価を受けているように思われない。その背景には、従来サイモンの喜劇が大衆娯楽として受容されて機能してきた現実がある。そして、その評価の主な関心は笑いを通して観客の共感を生む物語と人物描写、巧みに組み込まれたギャグに向けられており、その演劇的な構造、あるいは工夫や技巧的なうちドラマツルギーへの関心は希薄であった。この一元的評価が彼の作品が持つ多面的価値を看過させてきたといえるだろう。</p> <p>サイモンの作品は今も再演され続けているが、取り上げられる演目は限られ、新たな意味が見出されることはなく、現代において再演することの意義が曖昧であることが多い。観客の笑いも当時のような爆笑ではなく、予期された程度の笑いでしかない。こうした状況の一因は、サイモンの長きにわたる活躍がアメリカ喜劇の枠組みを固定化させたこと、そして笑いの形式や質が多様化したことにより、古典的な喜劇形式が時代に対応しきれなくなったことにあると考えられる。不条理劇やアンダーグラウンドシアターなど、新しいジャンルに「笑い」の要素が吸収されていき、コメディのある要素が別の路線へ向かって行った。そのために、純然たる大衆喜劇をサイモンひとりが背負うはめになつたのかもしれない。</p> <p>加えて、サイモンの評価が1980年代から90年代で停滞していることにも注意すべきである。その当時の批評と研究は、単なる笑劇ではなく人間の悲哀を描いた奥深い作品であることを主張する論調のもので、作品に一定の評価を与えたが、それ以降、新しい視点からの再解釈はほとんど行われていない。その時代に、彼の喜劇作品の評価はひとつの到達点を迎ってしまったかのような感がある。果たして、サイモンのコメディはもはやノスタルジックな文脈でしか語られることはないのだろうか。</p> <p>これまでの多くの作品評価は、登場人物たちの心理的侧面からの精神分析批評によって行われ、その分析から導かれた解釈の公約数により現在ではそれぞれ固定化された解釈が作品に与えられている。だが、これまでとは異なる視点によりドラマツルギーと劇構造に注目することで、サイモンのコメディの新しいアイデンティティを発見することができる。それにより、現在あるいは将来において、それまでとは違う新しい視点で、観客の共感と問題意識に働きかけるものがある上演をすることができる。書かれた時代背景にもたれかかるようなコメディとしてではなく、普遍性を備えたモダンドラマとして、サイモンの劇を次の時代へ継承することが可能になるだろう。</p> <p>本研究の目的は、サイモンの作品を従来の「笑いの劇」という枠組みから解放し、モダンドラマの作品として再評価し、新たな視座を提案することにある。具体的には、これまでの多くの研究のように、娯楽喜劇にもかかわらず深い主題を持つというそのギャップ性に意義を見出すというよりも、作品から「笑い」がもたらす娯楽性の観点を排除し、ひとつの現代演劇作品とみた上で、そこに仕掛けられた「笑い」とは別の「喜劇性」の存在を確認し、それが劇構造の中にどのようにして組み込まれているかを検証する。従って本論では喜劇研究ではあるが、「笑い」の技巧についての分析には向かわない。観客万人が認めるものであろうニール・サイモンのコメディのおかしさを生む「笑い」の部分を切り離した上で、作品の持つ主題、ドラマツルギー、劇構造との関係に注視して作品の新たな意義の探求へと向かう。</p> <p>本論文の構成は、序論と本論全7章及び結論から成る。第1章から第6章では、サイモンの幅広い活動期の中から各章ごとに一作品を取り上げ、それぞれ新たな視座より作品を見直し、それまで論じられてこなかった問題点を発</p> |  |

見し、考察と検証を加える。続く第7章ではサイモンの劇全体に対してその考察を広げる。演劇と映画の歴史的文脈の中のひとつのジャンルを指針として、ニール・サイモンの劇をその中に位置づけすることで、彼の喜劇全般に通底する主題の存在と意味を探る。彼のコメディを二十世紀後半の現代喜劇として独立させて考えるのではなく、あくまでも演劇と映画の歴史の延長線上で彼の喜劇を捉えなおす試みである。

第1章では、モダンドラマが抱える場所の問題、すなわち「家」という空間が登場人物に与える影響を「ジオプロジェクト」の観点から考察することで、サイモンの初期の喜劇のひとつである『はだしで散歩』が、実はモダンドラマ特有の問題と思われてきたものを共有していることを示す。

第2章では、サイモンの代表作のひとつである『おかしな二人』のオリジナル版とその後改訂された女性版との比較および各バージョンにおける婚姻のテーマの扱われ方を通して、サイモン・コメディの原点である純粋な喜劇がある時期に限界を迎えたこと、そしてその限界こそがさらなる次のステージへと彼の喜劇を押し進めたことを明らかにする。

第3章では、サイモンの喜劇の舞台に共通するニューヨーク、マンハッタンにある建物の一室の持つ意味が、幸福な場所から苦悩の場所へと変化するという、サイモンの作品史においては重要な転換点が『プラザ・スイート』にあることを示す。『プラザ・スイート』とその前後の作品における劇空間を時系列で比較することにより、サイモンの劇中の部屋という空間の変化が象徴する転換点とその転換点を促したと思われる二つの要因を解明する。

第4章では、『サンシャイン・ボーイズ』の形式と構造、特に本作終幕におかれた「カーテンコール」に着目して、作品におけるメタシアター性を考察することにより、従来からの「老いや老人の孤独」という解釈に留まらない新しい視点を提示する。

第5章では、『ブライトン・ビーチ回顧録』について、主人公が過去を振り返って語るテネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』に類似した「メモリー・プレイ」であるとされたこれまでの解釈とは別の、もう一つの記憶の劇「メモワール・プレイ」としての新たな解釈を提示し、その過去から未来への視線を探る。

第6章では、サイモンの喜劇としては初めて舞台を都会から森の中に移した作品である『求婚—プロポーズ—』をエコロジカルな観点から分析し、サイモンの喜劇に新たな表現形式とテーマが加わったことを示す。

第7章では、彼の喜劇が、シェイクスピアのロマンス劇やイプセンなどの近代劇を継承したとするハリウッド製トーキー映画の「再婚喜劇」のジャンルを、どのように映画から演劇の分野においてそれを継承し直し、さらにいかなる形でそのジャンルを演劇において発展させたか、その歴史的文脈を考察する。サイモンの喜劇を概観すると、作品には「再婚」という通底するテーマがみられる。その主題を通して、人生の再生と人間関係の再構築が描かれる。彼の婚姻を扱う喜劇が、「葛藤と赦し」を通じて「対立から和解」という、幸福に向けての第三の選択肢を模索する過程を様々な劇的工夫によって示したことを確認する。

以上各章において議論してきた問題点を統合して総体的なニール・サイモンのコメディの本質について考えるとき、あるひとつの根源的な主題、「人生再生と継続」という点にたどりつく。彼は作品の中でそれを常に描き続けてきたといえるだろう。どの作品の登場人物たちも過去の記憶を携えながら、ときにはその苦い経験の上に立って、自らの幸福の追求のために人生をやりなおそうと、もがきながらも生きていこうとする。

サイモンの作品は、大衆向け娯楽作品としての喜劇性あるいはその喜劇の中にあるシリアルな要素にばかり目が向かれ評価されてきたが、現在における再評価のポイントは「笑い」以外にある彼の喜劇の本質、つまりは「人生再生と継続」とそれを可能にする「喜劇の精神」にある。

特に彼の「再婚」というテーマは、サイモン作品に共通する重要なモチーフである。『はだしで散歩』ではその成功例が、『おかしな二人』や『サンシャイン・ボーイズ』ではその失敗例が描かれた。だがサイモンは失敗の中にも再生の可能性を示し、劇の結末には必ず「赦し」と「希望」を残した。彼の喜劇においては、失敗や挫折が人生の最後を意味するものではなく、新たな再生の出発点であることを教えてくれる。サイモンの劇が「ハートウォーミング」な印象を観た者に抱かせる理由はここにある。

ニール・サイモンの劇は、単なる笑いを超えて、他者との融和の道を探求する。善悪や真偽、聖俗のように二項対立を描く悲劇とは異なり、彼の喜劇のゴールは対立に勝敗の結論をつけることなく、また葛藤から逃げることもなく、現実の困難や失敗を受け入れて、さらにそこから再生し、人生を継続させる道を模索することにある。対立者や環境と向き合いながら、対話の中で、第三の選択肢を見出すことに彼の喜劇の真価がある。

ニール・サイモンの「喜劇の精神」とは、人生の再生を目的として、対立者、対立環境からの逃避や敗北の選択をすることではなく、自分自身を修正し、相手との融和の道を模索しながら、何度もトライする精神のことであり、笑いを超えたその「喜劇の精神」に立脚し、様々な劇的実験を作品ごとに取り入れながら、彼は以上で明らかにしたような独自のドラマツルギーを確立したと結論づける。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏名 ( 滝 尻 浩 士 ) |                        |       |
|----------------|------------------------|-------|
|                | (職)                    | 氏名    |
| 論文審査担当者        | 主査 大阪大学 特任教授<br>(兼任教授) | 永田 靖  |
|                | 副査 大阪大学 教授             | 伊東 伸宏 |
|                | 副査 大阪大学 教授             | 中尾 薫  |
|                | 副査 大阪大学 講師             | 伊藤 寧美 |

## 論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： ニール・サイモンの喜劇の精神 — 人生再生と継続のためのドラマツルギー —

学位申請者 滝尻浩士

論文審査担当者

主査 大阪大学特任教授（兼任教授） 永田靖  
副査 大阪大学教授 伊東信宏  
副査 大阪大学教授 中尾薰  
副査 大阪大学講師 伊藤寧美

【論文内容の要旨】

本論文は、ニール・サイモンの主要な劇の、とりわけドラマツルギーを中心に検討を加え、主には商業演劇において成功した劇作家であるこの作家の再評価を企てるものである。本論は7章立て、序論と結論を加えて、400字詰原稿用紙にして約400枚である。第1章と第2章では初期作品の『はだしで散歩』(1963)、『おかしな二人』(1965)をそれぞれ取り上げて、いわゆる「モダン・ドラマ」論の範疇への導入を試みている。第1章で、ジオ・パソロジーの観点から、ドラマ論一般における「場所」の問題を作品に照らして解明し、社会秩序と人間本来のあり方の対照関係を炙り出した。後者では、離婚率が増加し始めるこの時代のアメリカを背景にした一種の社会劇の様相を明らかにしたと同時に、この作品の登場人物をすべて女性にした改作(1985)も比較対照して論じて、同時代の女性意識の取り上げ方の問題を指摘した。第3章では『プラザ・スイート』(1968)をドラマツルギー上の転換点に位置するものとして取り上げた。このホテルの「スイート・ルーム」というそれまでの劇空間とは異なる空間を舞台に設定したことについて論じ、それまでの幸福な場所としての家庭を離れて、苦悩の場所への変化を明らかにして、その後の主題系の変化をもたらしたことを示した。第4章では、『サンシャイン・ボーイズ』(1972)を取り上げ、その形式と構造について論究し、そのメタ・シアター的性質を明らかにした。ここでは人生末期の元コメディ俳優とその相方俳優とのやり取りを中心としたこの喜劇の枠組みと、それを語る語り手たる相方俳優の視点との二重性を、終幕におかれた「カーテンコール」の読解により明らかになった。そのことで単に「人生末期の老い」という従来の解釈に留まらない新しい視点を提示した。第5章では、『ブライトン・ビーチ回顧録』(1983)について、劇中から現在に投げ出される変則的な記憶の劇であることを明らかにした。テネシー・ウィリアムズ『ガラスの動物園』に類似した「追憶の劇」と理解されてきた従来の解釈とは異なり、誰も追憶はしていない、未来の誰か(観客)が初めて追憶できるその時間的複層性が、この劇の内容と不可分な関係にあることを示した。第6章では、『求婚—プロポーズルーズ—』(1997)を取り上げて検討を加えた。サイモンの劇はほとんどが都会の室内劇の形式を取るが、ここでは初めて都会から離れた森の中に舞台が設定されたことに着目し、この作品をエコロジカルな観点から分析することで、サイモンの喜劇に新たな表現形式とテーマが加わったことを示した。ここでは、森や小鳥、木々や草花などが劇中に際立ったモチーフとして用いられており、これら自然の中での人間のやり取りを

通じて、都会での不和や困難が緩やかに融和へと導かれる様相を明らかにした。第7章では、これら取り上げて議論してきたサイモンの劇が、シェイクスピアのロマンス劇やイプセンなどの近代劇を継承したとするハリウッド映画の「再婚喜劇」の構造を持つことを明らかにした。サイモンの劇では、ほとんどが婚姻を扱うが、その多くが葛藤と赦しを通じて、対立から和解という幸福に向けての第三の選択肢を模索する過程を様々な劇的工夫によって示していることを明らかにした。これらの分析を通じて、ニール・サイモンの劇は人生の再生を目的として、対立する者や対立する環境からの逃避や敗北ではなく、主人公自身を修正し、相手との融和の道を模索するという「喜劇の精神」に立脚していることを明らかにした。

### 【論文審査の結果の要旨】

60年代以降にブロードウェイをはじめとして、多くは商業演劇の範疇で繰り返し上演されて来たニール・サイモンの劇は、いわゆるモダン・ドラマ論の中ではドラマツルギーや劇的世界についてはあまり論じられて来なかつた。本論文はそのサイモンの劇を網羅的に概観した上で、初期から晩年までの全体像の流れを把握し、そのドラマツルギーの変遷を追いながら、作品世界の解明を試みたものである。全体の作品歴の中で『プラザ・スイート』を転換点と置き、その後の技巧上際立った特質を持つようになっていくことが具体的に提示され、あまり論じられて来なかつたいくつかのサイモン劇のドラマツルギー上の独自性と革新性が明らかにされ、高く評価された。第1には、全体に劇の場所への観点を軸にして、単に多く家庭劇の形式をとったサイモン劇の、劇の空間だけ論じるのではなく、その「劇外空間」をも論点に入れて議論することで、『はだしで散歩』の登場人物の性格づけや、『プラザ・スイート』の劇解釈に新規性をもたらしている。第2には『サンシャイン・ボーイズ』に、主人公の相方俳優の観点を設定しているを取り上げて議論し、その劇世界のメタシアター的な多層性を示して、作品解釈に繋げている点も評価された。また第3には『ブライトン・ビーチ回顧録』を単に記憶の劇、追憶の劇と見るのではなく、主人公の観客への傍白を取り上げて、主人公が実は何も回想などしていないプロットの複雑さを明らかにした。そのことで劇の完成は未来へと投げ出される新しい形式を持つことが論じられた。さらには『プロポザルズ』において、室内劇の形式から離れた屋外劇の形式をとり、とりわけ都会を離れた森の中を舞台としていること、そこに森や小鳥など自然のモチーフを取り入れて、エコロジカルな関心を呼び覚ますとともに、自然による治癒という観点を劇が示していることを明らかにした。最終的には、ハリウッド映画の「再婚喜劇」のドラマツルギーとの類似性を示しつつ、サイモン劇の「和解」の主題とが結びつくことが明らかになった。

しかし問題点も指摘された。これら取り上げられた6作品以外の作品への言及が少ないとや、ジェンダー論からの捉え返しが十分でないこと、また各章が独立している傾向が強く、各章で設定されている観点やアプローチが必ずしも論文全体で一貫はしていない点も指摘された。またドラマツルギーを論じつつ、最終章が主題を中心にして全体をまとめている点も問題点とされた。

これらの問題については、適宜適切に回答もし、今後の課題として明確にもしたが、これらの問題が認められるものの、全体としてはニール・サイモンの劇の新しい解釈を多く含むものであり、高く評価できる。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。